

1. なぜ野生生物を保全しなければならないか—野生生物保全の意味

なぜ野生生物を保全しなければならないか。この問いに答えるためには、あらためて「野生生物とは人間の助けを借りることなく自分で生きてゆく生物である」ということを確認する必要があります。人のはたらきかけを必要しない世界ですから、人間の意志の及ばない世界ですし、人間の意志によって存在しているのではないということがもっとも大事なことです。生きものが自分たちの理にそって存在している存在であることに注目する必要があります。

人間は自分の意志で、思いで存在し、生きものや自然にはたらきかけて生きています。人間の意志とは無関係で生きているものというのは、私たち人間の存在の理とはちがった理で存在しているものです。つまり他者なのです。それは、われわれ人間の知恵をこえたところで世界が形成されています。私たちの、自分に対する、取り巻く世界に対する知識と考え方は、人類の長い歴史のなかで大きく発展してきましたし、それは十分信頼できるものです。しかしながら、自然の理のすべてを尽くしたものではなく、自然は、人間の知恵をはるかにこえた、わからないところが多い世界です。人間は、自身が身につけた理だけでなく、自然の理を自身のなかに組み入れて生存していかなければなりません。

このことから自ずからなぜ野生生物を保全しなければならないかという問いに対する答えが導き出されると思います。

1. 人間の立場からの野生生物保全の意義

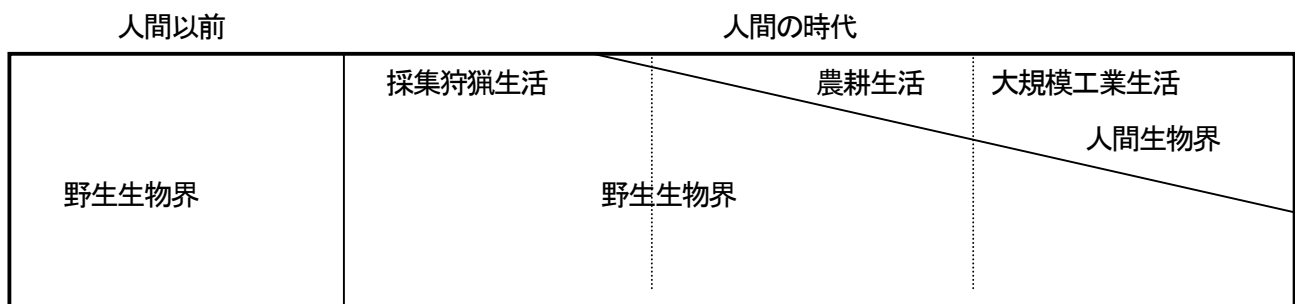
人間の立場からの保全の意義は、自然的、物質的なものと精神的なものに分けて考えてみます。

1.1. その自然的（物質的）必要性

自然的、物質的な意味は、資源確保と環境保全の二つの面があります。

a. 資源確保

資源的価値の第一は、採集狩猟民の食糧、生活物資確保としての意味です。人間もその歴史をみますと、初期段階は長い期間野生生活をしていました。採集狩猟生活者でした。



採集狩猟生活の基本原則は、食糧や生活物資で生物が絶滅しないように取得することです。もしそうした生物が絶滅するようでは、自分たちの生活も危機に陥り、絶滅する恐れがあります。採集狩猟生活をしている人は現在はあまり多くはありませんが、それぞれの人たちの生活の独自性を尊重し、保障するために、野生生物保全は不可欠なことです。

採集狩猟生活というのは、人間の歴史のなかで唯一野生生活の時代だったのです。この生活のしかたは人間の意志の理を自然の理に同調させねばならない生き方でもあります。

もう一つの資源確保としての野生生物保全は、品種改良や新薬の開発など技術開発です。

b. 環境保全

環境保全はよく知られていることです。数千万種からなる地球生物世界の多様性の主要部は野生生物によって形成されています。それは単に種類数が多いということだけでなく、そうした多種類の生物が網目のような相互関係を結び複雑な世界を作り上げています。この複雑な世界こそ人間の環境を保全している基盤になっています。

12. 精神文化の源泉として

1) 知的活動の源泉

a. 未知なる世界を広げ、深めてくれる。

野生生物世界は人間の知恵によって生まれたものではないから、われわれ人間の知的世界を広げ深めてくれる。

b. 自分とはちがう世界を知る

c. 自分の行為の効果を知る鏡として

2) 思想形成の上で

d. 自分たちの理とは異なる理において存在するものを認めその存在を保障する意識の形成

e. 人類滅亡後に目を向けて、その存続を保障する→環境倫理の「世代間倫理」を超える

f. 相手に対して何もしないことによって共存する

→相互扶助（共生）とはちがう、もう一つの共存のあり方

2. 自然そのものにとって

自然は、人間の立場から考えるだけでなく、自然の立場からもその意義を考えてみることにします。

その意義は、40億年前から続いてきた生きものの歴史を、損なうことなく未来に向けて絶えることなく繋げていくということです。

2. 人間の生き方としての野生生物保全

1. 野生生物保全は、絶滅の危機にあるものを、一部の自然愛好家や研究者によってすすめるだけでは実現できません。絶滅は人間の生活の結果として生まれてきているのですから、野生生物が絶滅の危機に陥らないように、生活のしかたを変革しなければなりません。これが、人間の生き方としての野生生物保全の意味です。野生生物を絶滅から救うにはこれ以外に方法はありません。

2. The Buying Stops , the Killing can too!

国際的な野生生物保全団体である ACAP が作成したビデオの鍵となっている言葉に、つぎのようなものがあります。

The Buying Stops , the Killing can too!

(買わなければ、殺すことはない)

これは、野生生物の商取引が絶滅の一つの重大な原因になっているからです。ペットなど野生生物そのものを買う、贅沢品、嗜好品、装飾品、権威づけの商品など野生生物のからだを原材料とした製品を買うことは、野生生物商取引の末端に位置しています。この末端がなくなれば、もう一方の発端となる野生生物の捕殺がなくなります。

現地での野生生物の捕殺者→現地での仲買人→商社→日本の卸業者→日本の小売店→買う人

野生生物やそのからだを商品として買うことは野生生物絶滅につながる行為であるということになります。また現地人は、わずかな代金で捕殺し、買う人は多額の代金を支払う。中間における仲買人、商社が大変な利益を得ています。そして野生生物が少なくなれば、現地人は生活の糧を失います。この中にはとくに重大なものとして、木材の商取引と結び付いた森林伐採による自然破壊があります。

3. 生活を変える

31. 野生生物保全としての生活とは

- a. 野生生物絶滅の原因とはならない生活
- b. 生きものとゆたかないかわる生活

32. 野生生物保全活動を成り立たせている諸活動の相互関係を見直す

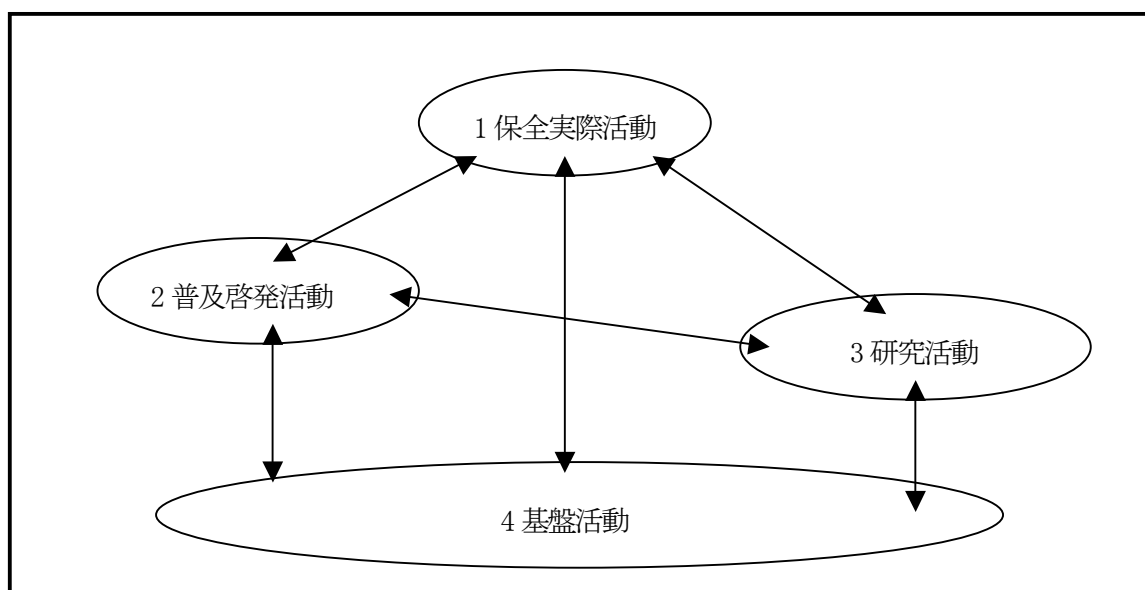
野生生物の絶滅の原因とはならない生活というのは、野生生物保全からみれば、極めて消極的なものです。人間が最低限度野生生物に対していなければならないことにすぎません。野生生物保全や生物多様性保全といった場合にはそういうものではなく、野生生物をふくめて生きものとゆたか

にかかわることのできる生活を目指すべきであると思います。それは、人間が物質的にも精神的にもゆたかな生活を営むことと、生物世界がゆたかに発展していくこととの両立、この二つが重ね合わさる生活のことです。

「物質的ゆたかさ」とは、大量生産・大量消費を意味していないことはいまでもありません。自然とのかかわり、生きものと物質とのかかわりがゆたかになることです。自然のゆたかさとは、多様で、複雑な相互関係にある状態を言います。「多様」は、単に種類数が多いということではありません。ゆたかなかかわりとは、そうした多様で複雑な相互関係のなかにある生きものと多様に複雑にかかわるということです。しかもそうした自然とのかかわりを通じて人間相互の関係も「たがいに傷つけあうことなく、みんな幸せになる」という人類共通の願いとむすびついたものであることはいまでもありません。

このようにみてきますと、前回みました野生生物保全の諸活動の相互関係を見直さねばなりません。野生生物が危機状態にある現地に行って、直接的に保全活動をするという活動は、いわば、野生生物保全にとっては消極的な、絶滅の危機の原因を取り除く活動であって、野生生物保全活動の中心になるのは、すべての人が「b. 生きものとゆたかないかかわる生活」実現のための普及啓発活動こそ重要な意味をもっているとみるべきです。それはまた、野生生物保全活動を一部の自然保護論者や自然愛好家、研究者など一部の人たちだけにまかせるのではなく、一般市民が自分自身の生活そのものを変えるということと、それを実現できるための普及啓発活動こそ重要な意味をもっているとみるべきでしょう。

保全活動の全体像 その1



保全活動の全体像 その2

ゆたかな野生生物世界が
維持継続できる生活の実現

野生生物絶滅につながる
行為を阻止する活動

